

阿弥陀如来像の諸相

礪波 恵 昭

みなさん、こんにちは。今日は、京都光華女子大学ならびに京都光華女子大学短期大学部、二〇二〇年度 第5回宗教講座で、タイトルを「阿弥陀如来像の諸相」と題して、京都市立芸術大学美術学部の礪波恵昭がお話をさせていただきます。よろしくお願いいたします。私の簡単な自己紹介を申し上げておきますと、現在、京都市立芸術大学美術学部で日本仏教美術史、特に日本の仏像の歴史を中心に教えております。

今日の講座の概要ですが、日本では、阿弥陀如来に対する信仰が、浄土真宗もそうですけれども、現代まで連続と続いております。そして、日本の仏教における一つの大きな流れと位置づけることができるわけです。それに呼応するように、すでに飛鳥時代から阿弥陀如来像の造像例が知られており、その後、複数の形式の阿弥陀如来像が制作され、時代による変遷を経て、現代に至っています。この講座では、阿弥陀如来像の主要な形式を時

代順に解説し、とくに平安時代後期以降、鎌倉時代までの比較的珍しい形式の像もとりあげて説明し、日本の仏教を理解する上での一助となるよう考えています。それでは、これから始めていきたいと思えます。どうぞよろしくお願いいたします。

まず最初に紹介しますのは飛鳥時代、七世紀の後期になりますけれども、この時期に制作されました日本で最も古い阿弥陀如来像の一つです。現在、東京国立博物館に所蔵されており、三体一組になって阿弥陀三尊を構成しますが、中央が阿弥陀如来像です。これが阿弥陀如来像だと分かる特徴ですが、真ん中の中尊（ちゅうそん）だけを見ても阿弥陀如来だと分かる要素はありません。向かって左手、つまり仏様自身の右手を上げて、左手を下ろす、これを施無畏（せむい）・与願印（よがんいん）と言いますが、この手の構えと指の曲げ方を印相（いんそう）と言いまして、これが仏の種類を特定する大きな手がかりになります。しかし、この右手を上げて左手を下ろす印相は、いろんな如来に共通する構えですから、真ん中の如来だけを見ても何如来かは分かりません。そこで、この両側に立っている脇侍（きょうじ）二体の菩薩像を見ますと、向かって右の脇侍には冠に小さな仏がついています。この仏は阿弥陀如来を表しています。そしてもう一

体、向かって左の菩薩は宝冠に小さな水瓶（すいびょう）を取りつけています。宝冠に阿弥陀如来の化仏（けぶつ）を表すのは観音菩薩と決まっています。そして、宝冠に小さな水瓶を表すのは勢至菩薩と決まっています。観音菩薩と勢至菩薩を両側に脇侍として従える如来は阿弥陀如来と決まっていますので、真ん中の如来が阿弥陀如来だと分かるわけです。これは、日本で一番古い部類の阿弥陀如来像ということになります。

同じく飛鳥時代後期の制作だと考えられる阿弥陀如来像をもう一例紹介しておきます。これは法隆寺に伝来している、伝橋夫人念持仏および厨子と言われる、仏像と、それを入れる仏壇的な入れ物、そして台座になります。この仏は、光明皇后のお母さんの橘三千代という方が普段から身近に置いて拜んでいた念持仏だと伝えられています。中央に阿弥陀三尊が安置されます。そして上に屋根が付いておりまして、下には台座があります。本体周辺は銅造ですけれども、屋根の部分及び台座は木造になっています。中央が阿弥陀如来、向かって右が観音菩薩、左が勢至菩薩になります。この中央の像も、特にこれが阿弥陀如来だと示す特徴はありません。両側に立っている菩薩二体を見ると、宝冠に小さな阿弥陀如来の化仏を表す観音菩薩と、水瓶を取りつけている勢至菩薩ということが分かりますので、中央が阿弥陀如来であるということになるわけです。この阿弥陀三尊像も日本で

は古い部類になりますが、大変美しく、優しい表情の、綺麗な衣をした、大変見事な仏様です。

この阿弥陀三尊が表される床に当たる部分を台盤と言います。さざ波が立っている蓮の池を浅く浮き彫りにした銅製の台盤をベースにして、そこから阿弥陀三尊を支える蓮の茎が立ち上がって、その上に蓮の花が咲いて、その上に阿弥陀三尊がいるというデザインになっています。蓮の池を一つの主題として展開していく構成です。蓮の池は極楽浄土にあるとされている池、そこに蓮の花が咲いているとされているのですけれども、阿弥陀如来は極楽浄土の教主ですから、極楽浄土の池をモチーフにした台座の構成になっています。そして、その池から、阿弥陀如来を支える蓮の花の茎、脇侍の菩薩を支える蓮の花の茎、そして、後ろの後屏（こうびょう）を支える植物の茎を束ねたものが立ち上がっているという構成になっています。

台盤には小さなさざ波が数多く立っています。そこに蓮の葉が上を向いたり下を向いたりしているものが交じっていて、所々に渦巻きのようなさざ波が立っているという非常に面白いデザインになっています。これも極楽浄土の蓮の池を意識したものが浅浮き彫りで表されているということになります。

そして、阿弥陀三尊の後ろにある後屏ですけれども、これにも極楽浄土にいるような天人が五体表されています。その中央の一人が、阿弥陀如来の後ろの透し彫りの頭光（ずこ）を支えるデザインになっています。この後屏の左右の部分の浅浮き彫りは、植物の茎のようなものが絡み合っていて、その中に蓮の葉や蓮の花があり、その蓮の花の上に天人がいるという構成になっています。

これは阿弥陀三尊がいる一番下の木製の台座の部分です。両側面は供養者の絵ですけれども、背面は蓮華化生（れんげけしやう）と言いまして、蓮の花から生まれ変わる人を描いています。亡くなった人は極楽浄土に生まれ変わる時に、蓮の花から生まれ出るとされていますが、それがこの木製の台座部分に描かれています。

次に、他の飛鳥時代後期の阿弥陀如来像を見ていきたいと思えます。先ほどの伝橘夫人念持仏および厨子も法隆寺所蔵でしたけれども、これは法隆寺の金堂、その内部の写真です。飛鳥時代の仏像を中心に多くの仏像が並んでいます、大変、濃密な空間になっています。残念なことに、描かれた壁画のオリジナルの部分は火事で大部分が焼けてしまっています。大きく損傷してしまっています。これは火事で焼ける前の写真ですが、その中に『阿弥陀浄土図』があります。その名の通り、中央が阿弥陀如来、両側に立っている大きな仏

が観音菩薩と勢至菩薩になつています。阿弥陀如来が両手を中央で構えています。これが説法印（せっぽういん）、あるいは転法輪印（てんぽうりんいん）と言ひまして、仏が説法をされる時の印相であるとされています。転法輪とは「法輪を転がす」という意味で、「説法」と同じなのですが、その手の構えをする阿弥陀如来がここに表されています。日本では、胸の前で説法印、あるいは転法輪印を結ぶ如来は阿弥陀如来と決まっていますので、一番古い例の一つがこの絵ということになります。

他にこの説法印（転法輪印）を表したものとしては、現在は東京国立博物館に所蔵されていますが、元々は法隆寺にありました押出仏（おしだしぶつ）です。これは銅版を型に押し当てて、型の凹凸を写しとって仏たちの姿を表したもので、鍍金（金メッキ）を施して、お寺のお堂内部に飾ったり、あるいは貴族などが個人で今の仏壇のようなところに納めて拜んでいたようなものです。中央が説法印（転法輪印）の阿弥陀如来になつています。そして、両側の菩薩の宝冠を見ますと、はつきりとは分かりにくいかもしれませんが、観音菩薩が化仏、勢至菩薩が水瓶を付けていますので、阿弥陀三尊像を構成しているということになります。この、説法印（転法輪印）の阿弥陀如来像は、飛鳥時代の後期から奈良時代にかけて、そして平安時代前期によく作られていました。ただし、説法印（転

法輪印)の手の配置、組み合わせ、胸の前でどのように指を曲げるか、にはいくつかのバリエーションがありまして、完全に定まっているわけではありません。

法隆寺伝法堂阿弥陀如来及び両脇侍像も同様で、中尊は説法印(転法輪印)を結んでいますから、阿弥陀如来像だということが分かります。同じく、奈良の興福院(こんぶいん)に伝わっている阿弥陀如来及び両脇侍像も、中央の阿弥陀如来が胸の前で説法印(転法輪印)を結んでいます。両側の観音菩薩と勢至菩薩ですけれども、片脚を踏み下げた座り方をしているのが特徴です。このように脇侍が片脚を下ろして座るといふ形式は、奈良時代後期から平安時代前期にかけて見られまして、鎌倉時代にも一部、復古的にこのような形式の像が作られました。

他に説法印(転法輪印)を表した阿弥陀如来像としては、奈良県の當麻寺(たいまじ)に伝わっている『観無量寿経变相図』があります。通称『当麻曼荼羅』と呼んでいます。元は縦横四メートル四方もある巨大な図柄を、綴織(つづれおり)という織物で表したものです。後に傷んでしまったものですから、何回か図柄を絵画で写しとってしまして、これは江戸時代に写し取られたものです。元の作品は中国の唐時代あるいは奈良時代、八世紀頃に作られたとされています。『観無量寿経』というお経の内容を図柄で表したもので、

中央に阿弥陀如来、左右に少し大きめに観音菩薩と勢至菩薩、その周りにお供の菩薩たち、手前には金色の蓮の池があります。そして、阿弥陀如来の後方には、阿弥陀如来がいらっしゃる極楽浄土の楼閣があり、その空中には阿弥陀如来を讃える天人や楽器が舞っているという形になります。右側には、縦に、阿弥陀如来を思い浮かべる修行の方法について描いてありまして、左側には『観無量寿経』が成立する経緯を図様化してあります。一番下の段は、阿弥陀如来を信仰し亡くなった人は生前の行いの良し悪しによって九段階の往生の仕方があるとされていますが、その九品往生（くぼんおうじょう）が描かれています。これはまた、後ほど紹介いたします。

この中央は阿弥陀如来です。やはり、説法印（転法輪印）を結んでいます。画面の下の方には、金色の池があり、蓮の花が生えていて、真つ白な赤ん坊のような人が何人か見えますけれども、これが亡くなった人が極楽浄土に生まれ変わる蓮華化生の場面だとされています。画面中央が阿弥陀如来、向かって右が観音菩薩、向かって左が勢至菩薩、そして、お供の菩薩が周りに集っているという構成です。そして、極楽浄土の楼閣が阿弥陀如来の後ろに左右対称に展開をして、空中には阿弥陀如来を讃える菩薩、天人たち、楽器が舞っています。楽器に直接リボンがついて飛んでいるのもあります。オリジナルの綴織の

『当麻曼荼羅』は、かなり傷んでしまつて図様がわかりにくい部分が多く、後の時代に綴織の織物の上に墨書きで線を強調したり、色を補つたりしている部分が大半です。

次に、平安時代に入りますと、また新たな阿弥陀如来が創られるようになります。そのきっかけは弘法大師空海です。中国に留学し、帰国後新しい密教（真言密教）を日本に伝え広めていきますが、真言密教では、今までになかった新たなタイプの仏が、それぞれに役割を持つて登場してきます。それらが日本で作られるようになりました。その代表的なものが、京都の東寺（教王護国寺）講堂の中に安置されている仏様たちです。左側に、腕が多く、恐ろしい形相をした明王像が見えますけれども、これらも密教独得の仏です。密教はそれまでより多くの仏を祀つて信仰していますが、その中に如来像があつて、その中に阿弥陀如来が入っています。この阿弥陀如来を含めた多くの仏は、曼荼羅の中に描かれています。

東寺に『伝真言院曼荼羅』として伝わっている中の『胎蔵曼荼羅』の中央部分には密教で一番大事な大日如来という仏の下に赤い衣を着た仏が表されていますが、これが阿弥陀如来です。無量寿如来とも言いますけれども、お腹の前で両手を組み合わせて阿弥陀の定

印（じょういん）を結んでいます。この印相は密教の中に出てくる阿弥陀如来の特色です。

そして、曼荼羅の中の仏たちを立体として作ることもよく行われました。これは、京都の安祥寺に伝わる五智如来で、普段は京都国立博物館に預けられています。左側から二体が阿弥陀如来（無量寿如来）です。現在の博物館では横一列で安置されていますけれども、本来は中央の大日如来を中心に、手前に二体、奥に二体という配置でした。この阿弥陀如来（無量寿如来）は、お腹の前で両手を組み合わせているのが分かります。現在この両手は新しいものになっていますが、当初もこのような手の構えでした。阿弥陀の定印（じょういん）という印相は、この後、日本で広く作られるようになっていきます。その例が、仁和寺阿弥陀如来及び両脇侍像です。中央の阿弥陀如来が阿弥陀の定印を結んでいます。この密教式の印相は、元々は五体一組の五智如来の中に作られている印相でしたけれども、後にだけが切り離されて、阿弥陀如来の一つの典型的な印相として日本で広まっていきました。その早い時期のものが仁和寺の阿弥陀如来像で、西暦八八八年に作られたと考えられています。

同じように阿弥陀の定印を採用した仏として、八九六年に制作されたと考えられる嵯峨

清凉寺の阿弥陀三尊像の中尊の阿弥陀如来像があります。左右の観音菩薩、勢至菩薩も類例のない印相をしています。これは先ほど出てきました密教の曼荼羅に根拠があるのではないかという指摘もあります。同じ様な阿弥陀の定印の仏はこの後数多く日本で作られるようになります。九四六年の岩船寺阿弥陀如来坐像もその一例です。

そして、阿弥陀の定印ではあるが少し系統の異なる阿弥陀如来像もありますので紹介をしておきます。それは常行三昧の本尊として作られた場合です。常行三昧は、天台宗比叡山延暦寺の円仁（えんにん）が中国で学んできた修行で、阿弥陀如来像を安置したお堂の中で、阿弥陀如来像の周りを、お経や念仏を唱え続けながら回りつづけるというものです。が、その際の阿弥陀如来像は、お腹の前で定印を結んで、なおかつ、頭は、今まで見てきた如来通例の螺髪（らほつ）ではなくて、髪の毛を伸ばして髻（もとどり）を結んで、その上に宝冠を被っています。そのような阿弥陀如来像を本尊として安置して、常行三昧という修行を行っていたと考えられています。

そのバリエーションも知られており、宝冠の下の髪の毛を伸ばさずに、螺髪を並べているのが特徴です。両方とも常行三昧の本尊として作られたと考えられますが、日本に現存するのは非常に少ない仏になります。常行三昧の本尊像は本来はこのような宝冠を被った

阿弥陀如来でしたけれども、しばらくすると、そうではないタイプの、普通の螺髪の仏を安置するお堂も出てきます。兵庫県の書寫山（しよしゃざん）円教寺の阿弥陀如来像がそれで、お腹の前で阿弥陀の定印を結んでいます。このように仏壇（須弥壇^{しゆみだん}）に安置されていますが、この仏壇は周囲を回れるようになっていきます。最近は観光用に本来は回れない仏壇の後ろにも入ることができるとありますが、このお堂（常行堂）は元々後ろに回れるようになっていて、像の周りを回って、お経や念仏を唱える修行をしていました。

次に、平安時代の半ばから後期に入ってきます。日本では西暦一〇五二年から末法の時代に入るとされてきました。お釈迦様の教えが、正法（しょうぼう）、像法（ぞうぼう）、末法（まつぼう）と、時間を経るにつれて本質が見失われてしまい、やがて、末法の時代になると、教えに従って悟りを開くのも難しく、それどころか戦乱や飢饉、天変地異と、大変なことが続く時代になる、とされています。その頃に日本の仏教に大きな変化がありました。生きている間は末法の時代なので、なかなか望みを持つことができません。現世（げんぜ）になかなか期待ができないので、せめて来世、死んだ後だけでも良いことがあ

るようと、来世に救ってくれる仏の代表として、阿弥陀如来が広く信仰されるようになりました。従いまして阿弥陀如来像の制作も末法時代の到来と共に非常に増えました。極楽浄土の教主である阿弥陀如来に、亡くなった後に地獄へ落ちたりせず、極楽浄土に生まれ変わらせてほしいと願う信仰が、この時期から日本で広く浸透します。これを、浄土に憧れる仏教という意味で、浄土教と呼んでいます。

この末法の時代に入つてすぐに建てられたのが京都宇治の平等院鳳凰堂です。西暦一〇五三年に落慶供養、つまり、完成したお祝いの儀式が行われています。一〇五三年は末法に入つて一年目ですので、意識して建てられたのは間違いありません。左右対称であったり、手前に池があったり、極楽浄土を強く意識して造つてあります。最初の方で見てもありました『当麻曼荼羅』にも左右対称の楼閣や手前に池が描かれていました。あれは元々お経を元にして作られたものですので、それと同じ構成がこの平等院鳳凰堂でも採用されています。お堂の中も極楽浄土を強く意識しています。中央に、お腹の前で阿弥陀の印相を結ぶ阿弥陀如来、壁の上部には小さい仏たちが取り付けられています。これは、極楽浄土の空中を舞つて阿弥陀如来を讃える仏たちで、雲中供養菩薩として知られています。そして、壁や扉には往生図、つまり亡くなった人が救われていく光景を描いた絵が複数配

置されています。天井を見上げると極彩色で、要所要所には鏡が取り付けられて、光を放つ工夫もされています。阿弥陀如来像の頭上には、貝の内側の光る部分を漆の中に埋め込んで文様を表す技法である豪華な螺鈿を使って飾られた天蓋が取り付けられています。

堂内をコンピュータグラフィックスで再現すると、非常に煌びやかで華やかな空間であったことがわかります。極楽浄土はこういうものだとお経に書かれていますから、それを意識して、絵を描いたり、雲中供養菩薩をかざり付けたりしています。柱や建築部材にも大変華やかな装飾文様が施されました。この扉には、亡くなった人が極楽浄土からやってきた阿弥陀如来とお供の聖衆（しょうじゅ）によって救い取られて、極楽浄土に帰って行く光景が描かれています。阿弥陀如来が白い雲に乗って、お供の二十五菩薩を連れてこの世にやってくる。山の向こうが極楽浄土という設定です。建物が見えますけれども、これが亡くなった人がいる現世です。この扉絵の一つに亡くなった人を救い取って極楽浄土へ帰って行くところを描いたものがあり、還（かえ）り来迎と言われています。この絵は今日の最後のお話に少し関わりますので、覚えておいてもらったらいいかと思います。雲の尾が手前側に来ており、阿弥陀如来と聖衆皆が向うを向いて帰っていくのが分かると思います。

この平等院鳳凰堂に安置されている阿弥陀如来像は、一〇五三年に定朝（じょうちやう）という仏師が作ったものです。当時のひとびと皆が定朝が作る仏を欲しがったくらい、当時としては最大級の賛辞を集めた仏師で、「仏の本様」（ほんよう＝お手本）、あるいは、「尊容満月の如し」など、定朝作の仏像を完璧なものたえである満月のようであると評価するなど、当時、天皇家や貴族から絶大な信用と人気を誇った仏師でした。この像もお腹の前で定印を結んでいまして、平安時代前期から流行するようになってきた形式です。全体に力みなく、大変ゆったりと座った、非常に優しい、当時の貴族好みの仏になります。瞼を半分閉じて眠るような表情になっていますし、口元も優しく閉じていて、死後、極楽浄土にすくい取ってくれる阿弥陀如来としての、視覚的な表現としては大変相応しいものだと言えらると思います。

お堂の上に取り付けられている雲中供養菩薩も定朝の工房で作られました。いろんなポーズで、様々な楽器を持っています。胸の前で合掌する、地藏菩薩のような、頭を丸めたお坊さんのような姿の像もあります。非常に優美で、ポーズも自由で、見ていて飽きない雲中供養菩薩です。舞を舞っているような感じの像もあります。

こうして平安時代後期には、末法の時代の到来と共に阿弥陀如来の信仰が広がっていき

ます。阿弥陀如来に何とか助けてもらいたい、末法の世界では現世では何も期待できないけれども、せめて来世だけでも良いことがありますようにと、祈願する人が増えてきたんですね。そのような中で作られたのが、阿弥陀如来を九体一堂に安置する九体阿弥陀如来像です。平安時代から鎌倉時代にかけて九体阿弥陀如来像は三十数例あったことが記録から知られていますけれども、木造で平安時代のもは、京都の浄瑠璃寺に残っているものが唯一ということになります。山間の質素な造りのお堂で、貴族がお金を出して造ったものではなく、地元の人たちがお金を出し合って建てたと考えられます。平安京から離れた所にはありませんから、火事などの災害を受けずに現在まで伝わっています。

お堂の中には九体の阿弥陀如来像が安置されています。これは、『観無量寿経』に、生前の行いの良し悪しで往生の仕方が九段階あると説かれています。その段階は我々（死ぬ方）が決めるのではなくて、阿弥陀如来が決めることですので、常日頃善行を重ねている「上品上生」の段階から、普段は仏像を壊して薪として売ったり、お坊さんを捕まえたり、極悪非道の限りを尽くしたが、亡くなる瞬間に改心して阿弥陀如来にすがった「下生」の段階まで、その九段階どれに入ってもいいようにと、九体の阿弥陀如来像を安置しているものです。お堂の手前東側には池も配置されています。極楽浄土は西方、我々が

生きている世界から見て西の方にあるとされていますから、浄瑠璃寺のお堂や庭園も、極楽浄土を意識して造ってあります。西に九体阿弥陀如来を安置するお堂があって、その手前に極楽浄土に見立てた池が造られています。

ちなみに、九体阿弥陀如来像は、木造で古いものは浄瑠璃寺に残っているものが唯一ですけれども、もう少し範囲を広げると、平安時代後期には九州大分県の臼杵石仏に石造の九体阿弥陀如来像が伝えられています。ただし、これは左右の八体が立っている立像（りゆうぞう）である点が異なります。

九体阿弥陀如来像は、その後も時々造られます。九体造るのは大変ですから、しばしば造られるものではありませんが、江戸時代にかけていくつか知られています。長野県の蓮台寺に伝わる九体阿弥陀如来像もその一例です。一体だけが平安時代の古い仏像で重要文化財になっています。残りの八体は江戸時代に造られたものです。この九体阿弥陀如来像は印相がそれぞれ違うのが特徴で、お腹の前で両手を組み合わせる阿弥陀の定印は同じように見えますが、親指ともう一本、人差し指を曲げるパターンと、中指を曲げるパターンと、薬指を曲げるパターンの三通りあります。説法印（転法輪印）も親指ともう一本、どの指を曲げるかで三通りあります。他の三体は来迎印と言って、極楽浄土からこの世に亡

くなった人を迎えに来る時の手の構えとされているものです。右手を上げて親指ともう一本の指で輪を作り、左手は下ろしてやはり親指ともう一本の指で輪を作る印相になっています。中尊は来迎印で、これだけが古く平安時代のもので重要文化財に指定されています。

先ほど、往生には九段階あって、それに合わせて阿弥陀如来を九体造ったという話をしました。最初の方で紹介しました當麻寺に伝わっている『観無量寿経变相図』、元は綴織の作品ですが、それを絵に図様を写しとったものでは、その一番下の方にある九つの区画に、その九段階の往生の図が表されています。中央は、縁起段という、『当麻曼荼羅』が成立する由緒を描いてある部分ですが、右に四区画、左に五区画、合計九区画ある絵、これが九品往生図です。右端、普段から良い行いをしていた人が亡くなった場合には、阿弥陀如来が大勢のお供、二十五菩薩を連れてすぐに迎えに来て下さいます。そして、行いが悪くなつていくと、だんだんお供の数が減っていきます。左端は「下品下生」と言つて、普段から悪い行いを重ねていた人です。仏像を盗つてきては薪にして焼くなど、極悪非道なことをする人ですけれども、死ぬ前に改心して阿弥陀如来にすがれば、その亡くなった人の魂を載せる台だけがやって来ます。中央に金色の丸いものが見えていますが、これが

蓮台という魂を載せる台です。お供も誰も来ないのが寂しいのですが、蓮台だけが飛んできて、魂を載せて極楽浄土へ帰っていくといえます。このように九段階の区別があるとされてきました。私たちは九段階のどこに入るかを自分で選ばないので、九体の阿弥陀如来像を造ったというのが九体阿弥陀如来です。

さらに典型的な例としては、京都の即成院（そくじょういん）に、阿弥陀如来及び二十五菩薩坐像が伝わっています。元々伏見にあったものが後に移転したものですけれども、これは、極楽浄土から亡き人を迎えにやって来る阿弥陀如来とお供の二十五菩薩を一具として造ったものです。ただし、平安時代に制作が遡るのはその内の十体で、残りは江戸時代に補われています。観音菩薩は両手で蓮の台（うてな）を捧げていまして、そこに亡き人の魂を載せて帰ります。音楽を奏でて口を開けて歌をうたっているような菩薩もあります。他にも楽器を奏でていたり、天蓋といって身分の高い人に差し掛ける傘を持っていたりする菩薩たちが亡き人の元へ来迎するとされていますので、それを全部、仏像として造ったものです。絵画として描くのは多く残されていますが、仏像として造った例は、日本に残っているものは本当に数が少ないです。自分が死んだ後に救われるようにと願いを込めて、こういうものを造ったということになります。

次は京都の大原三千院にあります阿弥陀三尊像です。中央が阿弥陀如来で、両側が観音菩薩と勢至菩薩です。手前向かって右の観音菩薩は跪いて、亡き人の魂を蓮台に載せようとしています。左の勢至菩薩も合掌して、やはり両膝をついて亡き人の前に跪いています。中央の阿弥陀如来は、来迎印という、阿弥陀如来が亡き人を迎えに来る時の印相で、右手を上げて親指と人差し指を曲げて、左手も同じように親指と人差し指を曲げて膝の上に置いている、という手の構えになっていますが、この印相もこの頃以降、多く造られるようになっていきます。

他にも平安時代の特徴的なものとして、阿弥陀如来の両側に観音菩薩と勢至菩薩、それに地藏菩薩と龍樹菩薩という、頭を丸めた菩薩を二体付け加えて五体にしたものも伝わっています。これは、元々、愛媛県の保安寺に伝わった像で、現在、地藏菩薩・龍樹菩薩像の二体は奈良国立博物館の所有になっています。

京都の常照皇寺に伝わっている阿弥陀三尊像は、観音菩薩が手に捧げ持つ亡き人の魂を載せる蓮台が失われていますが、観音菩薩も勢至菩薩も不思議な脚のポーズをしています。これは亡き人の前に跪いて、片膝を付いて、もう片脚を下ろそうとしている瞬間だと考えられています。そして三体とも雲に乗って表され、極楽浄土から来迎した姿を表して

います。

次に、鎌倉時代に入ります。鎌倉時代にはさらに様々なバリエーションの阿弥陀如来像が造られます。快慶が造った兵庫県の浄土寺に伝わる阿弥陀如来及び両脇侍像では、中央の阿弥陀如来は右手を下ろして左手を上げています。今、直前に紹介しました大原三千院などの来迎印は、右手を上げて左手を下ろしてありますので、この阿弥陀如来とは左右逆です。そして左手の構えも日本に例のないものですが、これは当時、中国から盛んに持ち込まれた絵画を元にして造られたからだと考えられています。この三尊も雲に乗っていません。後ろから見ると雲の尾が見えますけれども、極楽浄土からこの世に来迎する時の光景を表したものだと考えられています。ただし、今見えている雲はオリジナルではなくて、少し後の時代に付け足されたものではないかと考えられています。この雲の内側にはもう少し彫りの大きい雲が見つかっていますので、当初から、阿弥陀三尊が極楽浄土からこの世に亡き人を雲に乗って迎えに来るといふ動きを表した像だと考えられています。

その元になった絵と同じ図様が、京都の知恩院に伝わっている『阿弥陀浄土図』です。この頃、日本には同じような図様の絵が日宋貿易等で多く将来されていまして、それらは

日本の阿弥陀如来とは腕の上げ下げが左右逆になっていますので、こういう絵をお手本にしていると考えられています。中央が阿弥陀如来、向かって右が観音菩薩、向かって左が勢至菩薩です。やはり観音菩薩は冠正面に小さい阿弥陀如来を付けています。勢至菩薩は水瓶を付けています。そして、この観音菩薩と勢至菩薩は袈裟を着けています。菩薩は袈裟を着けないのが日本では通例ですが、この頃の中国絵画に描かれる菩薩は袈裟を着けるものが多くありますから、それが日本の鎌倉時代の仏教絵画や仏教彫刻にも影響を及ぼしたと考えられます。写真を並べてみると、知恩院阿弥陀浄土図の阿弥陀如来と、浄土寺阿弥陀三尊像の阿弥陀如来とは、腕の構えが同じであるということが分かります。爪を長く伸ばしているのも特徴です。記録には浄土寺阿弥陀三尊像は「中国で描かれた画像の阿弥陀三尊を元にした」と書いてあるので、それを確かめることができます。

他にも鎌倉時代には、同じ快慶が造った阿弥陀如来像で上半身裸のものが知られていますが。下半身には下着的な衣を着けているだけです。これは、このまま拜んでいたわけではないので、この上に実際に布で出来た衣を着せて、仏を台車に乗せて引っ張っていたらしいのです。お堂の中に安置するのではなくて、外へ引っ張っていきます。それを行道（ぎょうどう）と言いますが、その時に使っていた仏像だと考えられています。そして、人間が

菩薩の面を被って、装束を着けてお供をして、阿弥陀如来が多くのお供を連れて極楽浄土からこの世に亡き人を迎えに来る、来迎の光景を表していました。それを、来迎会（らいごうえ）とか、迎接会（ごうしょうえ）とか、迎講（むかえこう）という言い方をしますが、後には菩薩たちが練り歩くので、練り供養とも呼ばれるようになりました。現在でも奈良の當麻寺（『当麻曼荼羅』を紹介したお寺）、京都の即成院（二十五菩薩像を紹介したお寺）、大阪の平野にある大念仏寺などでは、このように面を付けて、装束を身につけた菩薩たちが登場します。

大念仏寺の練り供養では、亡き人の魂を載せる蓮台を持つている観音菩薩が登場します。その後、合掌する勢至菩薩がやってきます。それから、楽器を持った奏楽の菩薩たちが後に続きます。当時の人々は、自分が亡くなった時に、このようにお迎えがやってきて、極楽浄土に救われたいと願っていたのです。昔は様々なところ、例えば、大阪の四天王寺等でも行われていたという記録が残されていますが、現在でも先ほど紹介しました寺院をはじめ、全国複数のお寺でこういう法会が行われています。

そして、鎌倉時代には後の時代にまで作り続けられることになる阿弥陀如来立像の典型的な姿の像が造られます。これは快慶が造った東大寺の阿弥陀如来立像で、右手を上げて

左手を下ろして、来迎印を結んでいます。立像の阿弥陀如来は、この後、現代まで非常に多く造られていまして、浄土真宗の本尊像もこの形式を踏襲しているものが多数あります。ですから、一番馴染みのある阿弥陀如来像だと言っていると思いますが、この原型を遡っていくと、鎌倉時代の快慶あたりの作例に辿り着くこととなります。いかにも仏様らしい姿といえます。大変端正で綺麗な姿です。これは表面に金泥塗という金の粉末を膠（にかわ）に混ぜたものを、衣の表面とか肌の表面に塗り、衣部分にはさらに切金文様という、金箔を細く切って文様を表す技法で装飾された、大変繊細なものになります。多様な切金文様が見事です。

今、紹介しましたのは阿弥陀如来像単独でしたが、これは和歌山県の光台院の阿弥陀三尊像で、両側に観音菩薩と勢至菩薩を配置した仏像です。極楽浄土からこの世に亡き人を迎えに来る三体が「立像」であることに意味があり、我々を救う働きをより明確に表したポーズだと考えられています。坐像は、如来や菩薩が我々を救うためにはどうしたらいいのかと瞑想し思索している姿で、立像は、私たちが救おうと働きかけている、今まさに現世にやって来ようとしている姿だとされています。三体とも立った姿で、向かって右側の観音菩薩が蓮台を持って私たちを救いにやってくる。そして勢至菩薩が合掌している。観

音菩薩と勢至菩薩を良く見ると、膝を軽く曲げて、今から跪こうとする姿を表しています。が、このような姿の三尊が鎌倉時代の初めに造られて、この後、このタイプの阿弥陀三尊像は浄土宗のお寺などでは多く安置されています。

この光台阿弥陀三尊像は、煌びやかに金色で全体を荘厳して光を演出しているかのようですが、この光が阿弥陀如来の意識である、無量光如来、あまねく光を放って私たちを照らし出して救ってくれる、ということを表したのではないかという指摘もされています。この阿弥陀三尊像も表面は金粉を膠で溶いて塗る金泥塗の上に切金文様を配置した技法で荘厳されています。光背や台座も大変豪華です。台座自体は木造ですけれども、蓮の花びらの先から瓔珞（ようらく）という玉を連ねた飾りが下がっていたり、要所に鍍金（金メッキ）をした金具を配置して、大変煌びやかな光の演出をはかっているとも受けとれます。それから阿弥陀如来の光背、つまり像の後ろにある飾りですけれども、金属製の鍍金（金メッキ）をした部材が中心となって、要所に珠が多くはめ込んであって、まばゆい光を放つ、大変豪華で煌びやかな光背です。観音菩薩像は、腰を曲げて、膝を曲げて、往生者（亡くなる人）の前に蓮台を捧げ出すポーズになっていますけれども、光背や宝冠、あるいは胸から垂れ下がっている胸飾（きょうしよく）や瓔珞も非常に豪華で煌びや

かで、やはり、光を意識して造られている可能性があります。

最後になりましたけれども、鎌倉時代の阿弥陀如来像で、類例は少ないながら特徴的な像がいくつか知られていますので紹介したいと思います。

まずは、善光寺式阿弥陀如来像と言われている阿弥陀三尊像があります。これは長野県の信濃善光寺の本尊を真似たものとされています。全国に善光寺信仰が広まると共に、同じ姿のものを写して造られることが多くなりました。六世紀に百済国から伝来したとされていますこの本尊像は、絶対の秘仏で誰も見たことがないので、その姿を写した像が今も善光寺に「お前立ち」という形で安置されています。それをもとに写した像が全国で造られるようになりました。

そのうちのひとつとして、神奈川県の大覚寺に伝わる善光寺式阿弥陀如来像を紹介しておきます。ただし、善光寺式の阿弥陀如来像の形式は、もともと阿弥陀如来像だったかどうかは良く分かっていません。この姿と似た像が伝わっています。現在、東京国立博物館に所蔵されている法隆寺献納宝物143号像です。朝鮮半島三国時代、六世紀に造られたとされている像ですが、この二つを比較すると、手の構えや、中尊の如来像が下ろした手

の二本の指を伸ばすこと、両側の菩薩の冠の形や両手を胸の前で拱手（きょうしゅ）する姿勢、三尊全体を一つの大きな光背で包んでいるところなどが共通します。そう考えると、朝鮮半島の百済で造られたものが善光寺本尊として伝わっているという伝説も、あながち荒唐無稽ではないと言えるかもしれません。ただし、元々は阿弥陀如来像として造られたものではなくて、いつの時代からか阿弥陀如来だと信仰されてきて、善光寺の本尊として全国に広まっていったものと考えられています。

そして、これも有名な像ですが、京都の禅林寺永観堂阿弥陀如来立像、通称「見返り阿弥陀像」として知られる像も紹介します。平安時代の終わりから鎌倉時代の初め、恐らく鎌倉時代に入っただけの頃に造られた像だと考えられますが、禅林寺を中興した永観が常行三昧という修行をしていたところ、その最中に阿弥陀如来が永観の前に現れて振り返り、「永観遅し」と言った時の姿を表した像だとされています。しかし、この振り返ったような姿の像はほかにも知られており、永観に関係のないお寺にもいくつか伝わっているのです。そう考えると、先ほど紹介しました平等院の扉絵にある還り来迎、つまり阿弥陀如来が極楽浄土からこの世に来迎し、亡き人の魂を迎え取って極楽浄土へ還っていく、その途中に、お供の聖衆（しょうじゅ）が遅れずに来ているかを、振り返って確かめる阿弥陀

如来の姿を表したものだとも考えられます。

この類例としては、東京の長寿院に伝わる阿弥陀如来立像がその例と考えられます。少しだけ首をかしげているように見えますが、これも見返り阿弥陀像の一例だと考えられています。山形の善光寺に伝わる像は身体も捻っており、同様の例と言えるでしょう。

ほかにも特徴的な阿弥陀如来像としては、東大寺に伝わっています。五劫思惟阿弥陀如来坐像があります。これは、阿弥陀如来が法蔵菩薩として世自在王仏のもとで修行している時に、五劫という果てしない時間、我々（衆生）を救うことを思惟した際、あまりにも長い時間だったので、髪の毛が伸び放題になったという姿を表しています。螺髪部分が巨大になってカツラを被っているように見えるのが特徴です。ただし厳密に考えると、修行したのは法蔵菩薩の時に、菩薩の髪は伸ばすのが通例で螺髪ではないはずなので、このような頭にはならないはずですが、こちらの方が視覚的に分かりやすいからでしょうか、鎌倉時代以降にこのような姿の像が時々造られるようになりました。腕の構えが違う形式の五劫思惟阿弥陀如来坐像も知られています。

また、大変珍しい作例としては、完全に裸の姿の阿弥陀如来立像があります。これはもちろんこのまま拜むのではなくて、下半身には裾（くん）という巻きスカートの様な衣

を、上半身にも袈裟を、それぞれ実際の布で作って着せて拝みます。なぜ、こういう像が造られたかと言いますと、如来には人々を救うはたらきが求められますが、生きて我々を救ってくれる「生身（しょうじん）思想」というものがありまして、人間と同じように布の衣を着た仏が、生きた仏として私たちにはたらきかけてくれる、そういうことを期待していたのではないかと考えられています。似た例としては、阿弥陀如来の肉身部分は裸の姿の木造で、衣は紙を糊で固めたもので造られた阿弥陀如来像も知られています。下半身にまとう裙と、覆肩衣（ふくけんえ）と言って右肩を覆う衣と袈裟とを組み合わせたものをそれぞれ紙で造り、それを着せ替えみたいに取り付けています。

他に特徴的な例として、當麻寺に伝来する、中に人が入るようになっていた像があります。先述しましたように、亡き人が来迎した阿弥陀如来とそのお供によって極楽浄土に救われていく場面を仮面劇のように表す法会が平安時代から行われており、来迎会（らいごうえ）、迎接会（ごうしょうえ）、練り供養などと呼ばれています。その際に登場したものらしいです。ちょうど胸の所に卍の紙が貼ってありますが、そこから外が見えるようになっていて、足元も分離するので人が入るようになっていて、極めて珍しい阿弥陀如来像です。

同様の例が岡山県の弘法寺に伝わっています。こちらは足元がなくて上半身だけですが、みぞおちのところに横一文字に孔が開いていて、そこから外が見えるようになっていきます。実際に人が被って儀式を行うらしいです。

他には、菌吹（はふき）阿弥陀如来立像を紹介しておきます。口を開けて菌を見せて、阿弥陀如来が説法をしている様子を表したものです。

最後にお示ししますのは、神奈川県浄光明寺に伝わる阿弥陀如来坐像です。奈良時代を中心に流行っていた説法印（転法輪印）を採用しているのも興味深いのですが、頭髮が螺髪で、しかも宝冠を被っています。これは、この頃の中国・宋の絵画が日本に盛んに伝えられ、それに基づいて造られたものではないかと考えられています。さらに、衣の表面が凸凹していますが、これは粘土を型押しして、それを貼り付けて上から色を塗る、土紋（どもん）装飾というもので、関東地方にしかない独特の表現技法です。仏像自体は木造ですが、文様の部分を盛り上げるために、粘土を型押ししたものを貼り付けています。そして、両側の脇侍の観音菩薩、勢至菩薩像は袈裟を身につけています。日本の菩薩像は袈裟を着けないのが通例ですが、中国のこの頃の絵画の菩薩は袈裟を着けていますから、そういうものに基づいたと考えられています。先ほど、兵庫浄土寺の快慶が造った阿弥陀

三尊像も中国の絵画を元にしておりと言いましたけれども、こちらも元になる中国の絵画の菩薩が袈裟を着けていたので、それに学んで採用したと考えられています。

今日は、多くの種類の像を紹介しましたが、特に平安時代後期から鎌倉時代にかけての阿弥陀如来像を詳しく採り上げました。阿弥陀の定印を採用した像や、来迎印の像、鎌倉時代に造られた阿弥陀三尊立像がその後広く現代まで造られているという、典型的な作例も解説しましたが、そうではない、特徴的な像もいくつか紹介しました。そして、様々な姿の阿弥陀如来像が何故造られたのか考えていきますと、非常に興味深いものがあります。今の我々のように普通に読み書きが出来る人が少ない時代に、目に見えるわかりやすい姿の仏像に基づいて仏教を広め、阿弥陀如来による救済を解ってもらおうということとは、大変意味のあることだったと思います。拜む人、信仰する人に、阿弥陀如来の救済を、より解りやすく、より具体的に伝わるように、多くの人が様々な工夫を凝らして、多様な姿の阿弥陀如来像が産み出されたのだと思います。阿弥陀如来の教えと救いに、いかに人々が期待していたか。そして、それに応えるために、どのような姿の像を考えていったのか、というようなことを今日の話から改めて考えて頂けたらと思っています。ご静聴あり

ありがとうございました。